

日本国の国葬

ベストピアは弱小微細な個人誌に過ぎず、私の個人的な月記に過ぎないが、毎月今回は何を書こうかと楽しみながら思案している。9月号は「国葬」にしようと思って、全ての国葬が終わるのを待って書き始めようと思っていた。事前に大切なかなりの時間を費やしてしまったことを今、後悔している。沢山の報道に目を通したが私が憤慨して書く意味があるのかと迷っていたところ、妻が「嫌なことをすると体を壊しますよ。やめなさい」と忠告してくれた。これで吹っ切れた。最小の文字で今月号を速やかに完成することにした。

心に残った短歌一首

「死してなお新たな疑惑の主となる疑惑にまみれしヒトの国葬」

（評）モリカケ桜問題に加え統一教会と深い関係があった疑惑が浮上。元首相の国葬への疑義を端的に呈して説得力がある。（作者 岡山県 浜口巳喜雄氏作）

政権には疑惑がつきものではあるが元首相ほど堂々と疑惑を否定し良心を括弧に入れて虚偽の答弁をした人はいないのではないかと私は思う。日本人の矜持を国際的にかなぐり捨て続けて外交を華やかに見せた人だと思う。

国語学に詳しい友人が元首相の功績は二つの漢字を辞書に復活させたことだと揶揄された一つは「忖度」、そして「閥閥」という難しい漢字（いずれも当用漢字には入っていない）が国民に浸透したと教えてくれた。「閥閥」は憲法改正に脈々と流れ出ている。元総理の人生脚本を分析する上で興味ある課題を提供してくれる。今まで地表にはあまり表れていなかった「忖度」は堂々と市民権を得て組織の末端にまで広まった。

私の印象に残っている（思い出すのも避けたいが）いくつかを列記してみたい

(1)見えに余る強行採決と閣議決定の巧みな運用。

では、閣議決定とは何か。法律用語は難しいので口語的に平易に表現すると概ね次のようになる。

- ①閣議とは内閣（行政権は内閣に属す）が職権を行う会議
- ②構成員は内閣総理大臣と大臣と名のつく人及び内閣官房長官、国家公安委員会委員長
- ③閣議は内閣総理大臣が主宰し毎週火曜日と金曜日に開催（定例のほか臨時その他あり）
- ④閣議は非公開、議事は全会一致。反対するものは罷免される。

何が決定されるか。今回の元首相の国葬のように本来議会で討論されるべきことでも総理大臣が発議するば殆どのが議題となり閣議決定される。難しい言葉で閣議決定の横暴を防ぐ条文はあるが、なんでもありの感がある。例えば今回の国葬は閣議決定。国民の過半数が反対するものでもあっても、決定されれば恥も外聞もなく施行される。また重大なこと、国会で審議すると反対意見を聞きそれに応答する時間がかかるので手短に法案にするために閣議決定をする。

安倍政権は、集団的自衛権の行使を容認するため、平成26年7月、集団的自衛権の行使は自衛権の範囲を超えるものであって憲法上許されないとしてきた従前の憲法解釈を変更する閣議決定を行った。

岸田総理は国葬を閣議決定で強行した。

現在のように国会議員の3分の2以上が与党にあるかぎり閣議決定は万能であると思われる。

アベのマスクも閣議決定（2020年4月）。あのカッコの悪い効果の疑わしいマスク486億円、その後の管理費用、廃棄費用を合計すると500億円を超える。予備費は大臣のお小遣いと言われても仕方のない使い放題である

閣議決定と予備費は堂々とした大臣（特に総理大臣）の思いのままではないだろうか。

(2)消費税の増税を2回するも選挙にはめっぽう強かった。

安倍チルドレンが数多く当選する等の力があつた。どこにそんな力があつたのか、原因が段々と明になりつつあるが、それも葬られるであろう。若い世代に人気があるのは教育効果、教科書で写真に載る、子供たちは親しみを持っているのだろう。国葬での写真が教科書に載ることによって安倍自民党の潜在的親密感が上がり、彼らが選挙権を持つ頃にはほぼ自動的に定着するだろう。投票前から組織的に手を回すやり方は、現下のプーチンのロシアへの併合国民投票と実質は変わらないのではないか。

(3)内閣人事局の設置をし忖度風土を強化した。

①内閣人事局の設置経緯は？

2013年の第185回国会に第2次安倍内閣が提出し、翌2014年の第186回国会で可決・成立した「国家公務員法等の一部を改正する法律」による内閣法改正で、同年5月30日に設置された。

②内閣人事局の設置理由は？

内閣の入れ替わりが激しいなかでは官僚主導の政治に偏りがちで、かねてから縦割り行政の弊害が問題視されていたため、政治主導の行政運営を目的とした内閣人事局が設置され、各省庁の課長より上の約600名を対象に、事務次官や局長、審議官などの人事を内閣官房が行うこととした。（官僚は出世のためには政治家の欲する答えを出していく。自分の初心＝国民のために働くという崇高な使命感もポストの前では崩れ落ちた。政官癒着）

③内閣人事局とは、

政府全体を見渡し、政府の果たすべき役割を維持しつつ、効率的・効果的な行政を実現するため、各府省の機構・定員等の審査・管理を行ってる。

④内閣人事局の権限は？

内閣人事局は、中央人事行政機関である内閣総理大臣を補佐する機関として、各府省等の人事に関する部局の長で構成される人事管理官会議、人事管理運営協議会等の主催や人事管理の統一的指針である人事管理運営方針の策定を行い、人事管理に関する総合調整を行っています。

(4)モリカケサクラの疑惑に懲りず恨みに死す。

人を殺してはならない。人間が神を知って以来万人に共通な律法である。

犯人は罰せられる。極刑を知らながら何故人は人を殺すのか。

人間は心の思う罪、行動に現れる罪と数多くの罪を持っている。神はそれを知りたもうて十戒を定めたのではないだろうか。

誰もが持っている恨みや復讐心が行動に現れるときは命にかかる大事件となり極刑につながる。万人が知っていることである。

今回の犯行は緻密な計画と長い時間をかけて実行されている。それだけ復讐心が強いことを意味している。復讐心は強くなればなるほどそのエネルギーは強力となる。あの傲慢とも思える自信に満ちた演説をする人が、あれほどの護衛の中で撃たれるとは誰も想像はできないであろう。犯行者の詳しい動機はこれから明らかになるだろうが「恨みと復讐」であることは明らかである。多くの人は良心でその悪を管理している。

あの厳しい警備体制の中で、あの人になぜ銃弾が当たったのだろうか。それは本気で守ってくれる人がいなかったからだと結論づけた。守るべく配置された人、即ち、命令によって配置されて人、訓練により使命感を持つように仕向けられていたプロである。そのプロが事件が起きた時に動けなかったのは一瞬使命感が喪失してしまったからではないだろうか。それは何を意味するか。結果としては「守る気がなかった」としか言いようがない。

(5)要人を狙うテロは過去にもあった。

明治時代の代表的な事件を文豪はどうみていたか

文豪夏目漱石の作品「門」に伊藤博文暗殺事件の描写がある。それを引用して本素稿を閉じたい。

『門』[第三章]の伊藤博文暗殺事件の描写

「どうして、まあ殺されたんでしょう」と御米は号外を見た時、宗助に聞いたと同じ事を又小六に向って聞いた。

「短銃（ピストル）をポンポン連発したのが命中したんです」と小六は正直に答えた。

「だけどさ。どうして、まあ殺されたんでしょう」

小六は要領を得ない様な顔をしている。宗助は落ち着いた調子で、

「やっぱり運命だなあ」と云って、茶碗の茶を旨そうに飲んだ。

御米はこれでも納得出来なかったと見えて、

「どうして又満洲などへ行ったんでしょう」と聞いた。
「本当にな」と宗助は腹が張って充分物足りた様子であった。
「なんでも露西亜に秘密な用があったんだそうです」と小六が真面目な顔をして云った。
御米は、「そう。でも厭ねえ。殺されちゃ」と云った。
「己みた様な腰弁は殺されちゃ厭だが、伊藤さんみた様な人は、哈爾濱[ハルピン]へ行っ
て殺される方が可[い]いんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利いた。
「あら、何故」
「何故って伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるのさ。ただ死んで御覧、こ
うは行かないよ」
「成程そんなものかも知れないな」と小六は少し感服した様だったが、やがて、「とにかく
満洲だの、哈爾濱だのって物騒な所ですね。僕は何だか危険な様な心持がしてならな
い」と云った。「そりゃ、色んな人が落ち合ってるからね」

「あとかき」にかえて

朝日新聞デジタル版EVNING-A

本日（2022年9月28日）のナビゲター市川美亜子さん

昨日執り行われた安倍元首相の国葬。夜、各局のニュースを熱心に見ていた12歳の息子が、ぽつりと漏らしました。「献花したい気持ちにも、反対デモに行きたい気持ちにもなったよ」。国会で議論せずに、多額の税金を使ったのは「おかしい」と思う。一方で、幼い頃からなじんだ元首相が突然亡くなったのは悲しいし、悼みたい……。話すうち、小学生なりに事態を受け止めようとして混乱しているのが伝わってきました。トップでご紹介するインタビューで宮間純一さんは「踏み絵を踏まされるような自己責任の形で、国民に丸投げ状態でした」と指摘します。この国葬が映し出した日本社会の姿とは――。日本が「健全な国」だということを皮肉にも表した、という分析とともに考えたいです。

（宮間さんとのインタビューは割愛しました）

パリ通信9月号

サン・ジェルマン・アン・レのモーリス・ドゥニ県立美術館

9月も半ばを過ぎ、パリは秋が深くなった。朝は7-8℃で肌寒く、昼間も20℃そこそこである。9月の新学期が始まり、猛暑、水不足、山火事など暑かったフランスの夏の被害も遠く感じられる。このまま一気に寒くなるとは思えないが、今冬のヨーロッパは寒さに苦しめられそうだ。

原発大国フランスだが電気の供給が心配されている。すでに電気料金は値上がりし、11月から更に15～20%の値上げが予定されている。電気、ガスなどエネルギー源の高騰で冬の暖房費が凄いことになりそうだ。

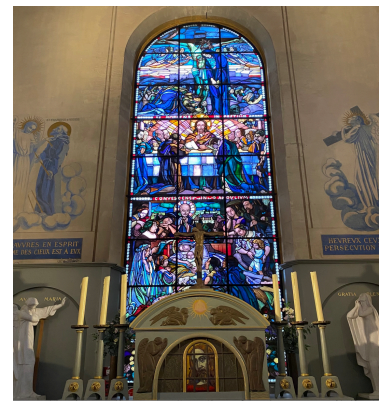
ロシアや外国にエネルギー源を依存しているドイツの事情はさらに深刻のようで、冬の寒さも一段と厳しいベルリンに住む日本人の友人はせっかくバスタブのある家にしたのにこの冬は短いシャワーで我慢しなければ、と嘆く。さらにこのところの円安で日本の貯蓄を崩して生活費を補っている身には厳しい冬になりそうだ。

ウクライナ戦争もこのまま長引きそうで、寒いヨーロッパの冬は戦争の行方をも左右すると言われている。ナポレオンも冬のモスクワの寒さに失脚し、ヒトラーもロシアの冬には勝てなかった。地面が凍り、雪が散らつく2月末に始まったウクライナ戦争もこれから厳しい冬の戦いに入るのかと思うと、早く終わって欲しいという思いが一層強くなる。

不安な冬に入る前に、せめて秋の日差しを感じようと一日のんびり外で過ごすことにし



た。17日(土)と18日(日)の週末は「ヨーロッパ文化遺産の日」である。普段は見学することができない文化遺産が一般公開される日で、沢山の人たちが列を作って週末を楽しんでいる。幸い天気も良く少し遠出気分
でサン・ジェルマン・アン・レの「モーリス・ドゥニ
県立美術館」へ行
った。修復工事
で何年も閉まってい



てこの10日再開したばかりのタイミングだ。

サン・ジェルマン・アン・レはパリから約30km西に離れた古い歴史の街である。サン・ジェルマン・アン・レ城は中世からフランス王家の住まいとして発展し、1638年ルイ14世が生まれた城としても知られる。そして20世紀前半モーリス・ドゥニが生涯を過ごした街でもある。

ナビ派の理論家モーリス・ドゥニ(1870-1943)は、画家、装飾家、版画家、グラフィスト、理論家、文芸・美術史評論家と多彩な才能の持ち主だった。ポール・セリュジエ、エドワード・ビュイヤール、ピエール・ボナールらとナビ派を形成し、宗教、イタリア、ブルターニュの風景をテーマにした作品を多く描いている。7人の子供の父として、敬虔なキリスト教徒として、パリとサン・ジェルマン・アン・レを往復する創作活動、夏は子供たちを連れてブルターニュ(ペロス・ギレック)の家で過ごし、家族の日常風景、浜辺で遊ぶ子供たちを描いた。

今は美術館になっているが、建物自体は17世紀末ルイ14世下にモンテспан夫人の発案で創立された王立病院だった。1802年にはナポレオン下施療院となり、その後所有者が何度も代わり、工場として使われることもあった。1875年イエズス会修道院が所有したが、1905年法でイエズス会も退出を余儀なくされた。この建物から遠くない場所で借家住まいをしていたモーリス・ドゥニは建物の一部をアトリエとして使用する許可を得て、1914年この館を購入し、住まい兼アトリエとして荒れていた内部の改装に尽くした。

1943年パリのサン・ジェルマン通りで交通事故で不慮の死を遂げた後、恵まれない子供たちを受け入れる活動に利用されていたが、



1976年国が買取り
モーリス・ドゥニ美術館として後世に残すことになった。
所有者になったモーリス・ドゥニは住まいと庭の再生に努め、特に聖ルイ礼拝堂は天井画、キリスト受難の14場面を描



いた壁画、祭壇、ステンドグラスなど宗教と装飾芸術が融合するモーリス・ドゥニらしい空間に生まれ変わっている。庭に出ると「死にゆくケンタウロス」(1914年作ブロンズ像、高さ292cm x 幅80cm x 長さ185cm)を始め、アントワーヌ・ブルデ

ル(1861-1929)の質の高い彫刻が目に入る。ブルデルが壁面のレリーフを彫り、モーリス・ドゥニがコンサートホールの天井画を描いたパリのシャンゼリゼ劇場のコラボレーションを思い出させる。

四方を高い石垣の塀に囲まれ、坂の敷地にある建物と庭を歩いた後に、サンジェルマン・アン・レのお城や自然に触れるとその風景がモーリス・ドゥニの作品中に生きていることを実感できた。

編者解説

写真1 サン・ジェルマン・アン・レ城 (PCより)

写真2 聖ルイ礼拝堂 (古賀順子さん撮影)

写真3 ミューズたち (古賀順子さん撮影)

写真4 猫とランソン夫人 (PCより。古賀さんからの写真が掲載できなかった)

パリから日帰りのできる場所で「パリ通の訪れる所」として有名です。

ベストピア本文は安倍国葬について語りたいので月末になります。